



第3回 NCDA ウェビナー、2020年5月21日（木）、21:00～22:00（日本時間）

概要（※ただし、逐語的な記述ではなく、大意で訳していることをご了承ください）

【趣旨文】

我々のコーチ育成に関する議論は、先進国が中心になって展開されています。コーチ育成に関する学術的研究もほとんどが北米、ヨーロッパ、アジア・オセアニアや南米の一部を中心に展開されており、発展した国のモデルと言えなくもありません。

しかし、質の高いコーチングを欲しているのはそのような国だけではありません。世界中の人達が質の高いコーチングを受けられ、スポーツを通して豊かな人生を歩んでいく礎を築いていけるようにお互いに力を合わせていく必要があります。新型コロナウイルス感染拡大が世界中で問題となっている今、ITの発達していないところでは、他者とのコミュニケーションが特にとりにくい状況になっていると考えられます。

今回のウェビナーでは日頃から開発途上国でコーチ育成やアスリート育成に取り組んでいるペレ・クヴァルスンド氏（主にザンビアを中心とするアフリカ南部で活動）とクリス・ナン氏（主にオセアニア島しょ地域で活動）をお招きし、国際的にコーチデベロッパーとして活躍するグレン・クンダリ氏（カナダプロゴルフ協会テクニカルディレクター）とともに、ITの壁の向こう側の風景に思いを馳せてみたいと思います。

【内容】

伊藤雅充の話（0:00～1:30）

イントロダクション

- ・今回のウェビナーの趣旨説明と司会のグレン・クンダリ氏の紹介

グレン・クンダリ氏の司会（1:30～5:00）

- ・自己紹介と2人のスピーカー、クヴァルスンド氏とナン氏の紹介

ペレ・クヴァルスンド氏の話提供（5:00～20:00）

- ・自己紹介
- ・南部アフリカ地域での活動について、現在では約20年ほど活動しており、世界のさまざま

まな国でも活動している。

- ・ 一歩引いてこの状況を考えてみたい。以前開催された ICCE のウェビナーもコーチデベロッパーの話から始まって、コーチの話にいたって、アスリートのための解決法を作り出すことを考えた。それでもやはりコーチが IT ツールを使えるようにサポートできることも重要。
- ・ インスタントメッセージアプリケーションの WhatsApp を使って、アフリカ南部にいたくさんのコーチデベロッパーに対してコーチがどのようなサポートが必要としているか、次のような質問を訊ねた。また、ブラジルのコーチデベロッパーにも聞いた。
 - (1) 調子はどうか、この極めて困難な時期に何をしているのか？
 - (2) あなたの競技のアスリートは、この時期に（家でのトレーニングなど）どうにかして活動をできているか？
 - (3) コーチたちはアスリートに対して何らかの形のサポートを提供できているか？（もしできているなら、どのようにして？）
 - (4) あなたは〔コーチデベロッパーとして〕コーチに対して何らかのサポートを提供できているか？（もしできているなら、どのようにして？）
- ・ そこから、「コミュニケーションが重要」ということが浮かび上がってきた。「何を聞くか」という内容よりも、人と人のやり取りそのものが重要だということもわかった。
- ・ そのなかでコーチたちの声を紹介。「自分のプログラムを評価して欲しい」というジュニアのサッカーコーチの声を紹介。「コーチデベロッパーとしてコーチに提案したのはアスリートたちとのソーシャルグループを作ること、また練習方法などのビデオを添えてアスリートに送ること、だった。また、アスリート同士がビデオを取り合って、コーチの意見を聞くための送るという方法を提案した」とするコーチデベロッパーの声を紹介。
- ・ さらにクヴァルスンド氏は、コーチやコーチデベロッパーが、トレーニングやサポートについて、どのようなタイプ、どのようなレベル、いつまで、どのようなタイミングで（どれくらい）、求めているかなどを問うた。
- ・ これらの質問に基づいて、自分たちがコーチやコーチデベロッパーたちをサポートするのかが決定する必要がある。また、一方的なコミュニケーションではなくて、双方向的なものでなければならない。
- ・ コーチのフィードバックは、現在のその地域のコンテキストとツールなどの利用可能性を踏まえたうえで、最終的に方法が決定されることになる。だから、新しいツールや方法を作ったり発見したりするよりも、現在あるプラットフォームやツールをうまく有効活用する必要がある。
- ・ コーチたちは、最新のツールにアクセスすることだけでなく、それを自分に使えるものとして適用することも難しい場合がある。また、長い時間のストリームウェビナーよりも、短いダウンロードできるモジュールがよいこともある。コーチの PC やネットワークのことなど、その他多くのことを考えなければならない。
- ・ そこで重要なのは、情報を共有・収集するという両方の観点から、最も簡単にアクセスできるツールが何をもたらすことができるのかを見出すこと。その意味で WhatsApp が最

も有効だと今のところは考えている。

グレン・クンダリ氏のコメント (20:00~21:00)

- ・インターネットアクセスや利用可能性などを考えないといけないことがわかった。
- ・皮肉なことに、答えを探している人が実はそうした問いに対する答えを出すことにかけて最良の経験を有しているということがある。

クリス・ナン氏の話題提供 (21:00~35:00)

- ・自己紹介
- ・まず課題としては、インターネットの利用が限定的あるいは可能ではない場所において、コーチたちがコーチデベロッパーに定期的に連絡を取ることができるようにすること。
- ・リオパラリンピックでは、実に5カ国が金メダルの50%を獲得している。優れた国はさらによくなっているが、そうでない国は出場することもできないような状況にある。
- ・オセアニアの9カ国（オーストラリア、フィジー、ニュージーランド、パプアニューギニア、サモア、ソロモン諸島、トンガ、バヌアツ、キリバス）の状況を共有。
- ・インターネットの利用可能状況として、先進国は87%、途上国は47%、最も発展していない国々では19%という問題がある。これが現状である。
- ・そうしたなかでも、これまでパプアニューギニアなどから成功を勝ち取ったアスリートたちもいる。オセアニア諸島の人々からの大きな関心を集めている。
- ・ワークショップの第1フェーズは、コーチたちがどのようにアスリートたちと接しているかなどを観察して、コーチングセッションを行い、コーチデベロッパーを特定した。そこには前回のウェビナーのスピーカーであったジャッキーも参加している。その際には使う言葉・言語に注意を払わなければならない（世界の人が英語を使えるわけではない）、どのような言葉が彼らにとって最もうまくいくかを理解しなければならない。
- ・それぞれの場の「コンテキスト（状況・環境）」の理解にも努めなければならない。交通手段にも困っているコーチたちもいるし、インターネットがないところもある。また、練習環境が整備されていないところもある。
- ・第2フェーズとして、アスリートにとっての適切なスポーツの競技と種目をしっかりと選ぶことが重要。もともとの技術的な部分を見極め、そこではどのような施設や用具を利用可能か、どんな強みがあるかを考える。バヌアツではすでに投げるのが得意な人たちに対して、やり投げという選択肢があった。
- ・コーチングの観点からは、第2フェーズとして、コーチ育成のワークショップを開いて、特定のコーチが練習を行って、コーチデベロッパーがそれに対してフィードバックを与えるということがある。自分がパプアニューギニアのコーチたちに対してコーチデベロッパーとして活動したことの経験。
- ・パプアニューギニアの環境でも優れたアスリートを育成することができた。
- ・2020年以降のコーチ育成として、アギトス財団やNCDAと共に活動することで、コーチたちのグループを形成するということがある。また、コーチの必要に応じたアプローチもとっている。

- ・私たちに、人々の人生を変えるポテンシャルがある。先進国の人間としては、途上国の素晴らしい才能をもった有望なアスリートたちをサポートしてあげなければならない。

クンダリ氏の応答と質問 (35:00~42:00)

- ・ペレやクリスのおかげで、自分はコーチ育成のさらなる新しい側面を見ることができた。
- ・IT やそれ以外のものでも何であれ、さまざまな国のなかで利用可能なものは何であるか。

クリスの応答 → まずは、最初は地域レベルで、次は国レベルで、意見を共有できる同じようなマインドを持った人たちのチームを結成すること。

ペレの応答 → アフリカ南部の3カ国では32の訓練を受けたコーチデベロッパーがいるが、若干保守的で、政治的なシステムに挑戦するということがない。自分たちとしてはそうした人たちを支援してあげることが重要だと考えている。それでも、彼らが彼ら自身の問題を解決しなければならない。

クリスの応答 → 現在ではコーチデベロッパーたちの中で情報を得るためにインターネットを利用する方法がある。それでも地に足をつける必要もある。

質疑応答 (42:00~1:00:00)

- ・質問:自分が活動しているカリビアン地域でどのようにして情熱を持ったパラスポーツのコーチたちを見つけることができるか？

クリスの応答 → 自分もいまセント・ヴィンセントやグレナダとのつながりがあるから紹介するよ。

- ・伊藤の質問:クリスは「システム」という言葉を使っているけど、この「システム」という言葉で何を意味しているのか？

クリスの応答 → ただ人が集まっているということではない。メンターがいて、コーチがコーチングに必要なことを知っていて、情報を共有できるということだろう。そのなかでは、他の国のコーチとの交流など、そうしたものも有益だと思う。

ペレの応答 → バランスの問題もある。アフリカ南部で活動しはじめた最初の10年間はまずシステムを構築することに力を注いだ。でも、この10年は、システムを構築する前段階として、人を育てる方に力を注いだ。その辺のバランスが必要だ。今は、コーチデベロッパーを育てることに力を注いでいる。最初システムを構築しようとしたときに失敗して、システムと人のバランスが重要だということを見つけた。NCDAで自分はプログラムを学ん

で、そのプログラムを使って個人のネットワークを作ることができた。

伊藤の応答 → これまでは NCDA ではスキルを中心に扱っていたが、今年からはシステム構築に移行した。スキルを学んでもそれを使うためのシステムがないとうまくいかないからだ。やはりそのバランスが重要なのは確か。

クリスの応答 → 今はコーチたちが育ってきたから、これからはそれをどうシステム化するかだろう。

・質問：IT が限定的だったりほとんど利用できなかつたりするところでは、どうやって将来のコーチたちとミーティングを設定するのか？ どこからはじめるかをどうやって知ることなのか？ 自分たちも合衆国の田舎地方に住んでいて、スペシャルオリンピックスでなかなかコミュニケーションを取りづらいという同じような問題を抱えている。

クリスの応答 → 自分としては学校の先生に色々と頼っている。[話の途中で通話が途切れる]

ペレの応答 → 自分たちにとって利用可能なものをまず見極めること。学校のネットワークや携帯電話は利用可能な部分があるからそれを利用したりする。

・質問：インドネシアの地域レベルでパラスポーツに関わっているが、健常者のスポーツと同じような扱いになっていない。そこでクリスが言及したシステムについて興味があるので、もう少しお話してほしい。また、政府からのパラスポーツに対する予算が常に少ないが、それを利用して、最大限活用するにはどうしたらいいか？

クリスの応答 → どうやってコーチにパラスポーツの魅力を感じてもらおうかだ。コーチだけじゃなくて、パラスポーツの障がいを持ったアスリートも招待する。そこで、健常者のスポーツもパラスポーツも別に異なることはないということを見せよう。そして、それを色々と話し合ってもらおう。また、予算や財務の問題に関してはかなり異なっていて、多くの国で障がいをもった人への支援が少ない。アメリカ、英国、オーストラリアに住んでいると障がいを持った人への財政的な支援があるが、島々ではそれとは異なって、人々にとって恥となるからと遠ざけられてしまっている人たちもいる。存在すら知られていない人たちもいる。統計上は障がいを持っている人が少ないことになっているが、それは真実ではなく、隠されているだけだ。だから、彼らにとって資金を得るのは簡単ではない。でもそのなかでも自分が見てきたなかではうまくいくアスリートが出てくると状況が好転することもある。

ペレの応答 → 財政に関しては、自分が活動している地域の政策や方針を見ると、障がいを持っている人たちの問題を解くことが重要だと強調して書いているが、実際は異なっていて、「言葉」と「財布」には溝があるのが現実だ。また、パラスポーツへのコーチのリクルートに関して言えば、どのスポーツでもコーチが問題を解決するに関しては同じで、別に能力や障がいがあるかどうかということではない。何をコーチするかという「内容」より、実際にコーチをするという「方法」の方に焦点を当てるべきだろう。

- ・ケオン・リチャードソン（NCDA 受講生）からの質問：コーチクリニックを開いた後に障がいをもったアスリートや学生を育成するなかでどのように内的な動機づけを高めることができるのか？

クリスの応答 → アスリートには向上の余地があったりと人々が考えているよりもパラスポーツのなかにも色々と機会があると思う。

- ・セブシソ・ケケッティ（NCDA 修了生）の質問：レソトではコーチングの技術的ノウハウもなく、コーチの資格ももっていないコーチたちがコーチングをしていて、その場合、コーチデベロッパーよりもまずコーチをリクルートする方に焦点をあてたほうがいいのだろうか。

クリスの応答 → 自分だったら最初からコーチデベロッパーを探そうとする。

クンダリ氏と伊藤の締め挨拶

- ・クンダリ氏：とても示唆が多いトークをありがとうございます。
- ・伊藤：今回の話を聞いて自分もモチベーションがあがった。ありがとうございます。

【ナビゲーター及びスピーカーの紹介】

ナビゲーター：伊藤雅充（NCDA 副ディレクター、本学コーチングエクセレンスセンター長）

司会：

グレン・クンダリは、COACH+（コーチプラス）の創始者であり、リードコーチデベロッパーである。COACH+は、コーチングの有効性を高めるためにスポーツ団体を支援することを主として目指す企業である。現在は9つの異なるスポーツ競技に関わっており、カナダプロゴルフ協会のテクニカル・ディレクターとしてコンサルタントを行っている。そのなか

ではカナダのゴルフ競技におけるコーチ資格プログラム実施に携わっている。また、カナダのゴルフ競技でマスター・コーチ・デベロッパーであり、カナダのコーチベロッパー・オブ・ザ・イヤーを受賞した経験も持つ。カナダのゴルフ競技の「長期的プレーヤー育成ガイド」を作成したチームの一員であった。アスリート育成やコーチ育成に関わるなかで、20 を超える国々においてインストラクターやコーチ育成について講演等を行ってきた。国際ゴルフ連盟と国際オリンピック委員会を代表して「国際ゴルフコーチングフレームワーク」を近年作成したグループの一員であった。またグレンは、NCDA の第3期修了生（2016-17年）であり、2017-18年にはシニアコーチデベロッパーとしてコーチデベロッパー発展プログラムに参加した。さらに、2018年にはNCDA コーチデベロッパー入門プログラムでファシリテーターを務めた。近年の顕著な活動としては、2019年にアラブ首長国連邦で開催されたスペシャル・オリンピックス・ワールドゲームズでカナダ代表のコーチを務めている。

<https://improveyourcoaching.ca/>

スピーカー：

ペレ・クヴァルスンドは、国際スポーツ開発およびコーチ育成の専門家である。ノルウェー・オリンピック・パラリンピック委員会（NIF）およびその国際開発・協力ユニットと活動を共にしており、個人レベルとシステムレベルの両方において、NIFがパートナーとしているスポーツ団体やコーチたちを支援している。ペレが情熱を注ぎ、自らの職務としているのは、コーチとアスリートが自国において実践面でも環境面でも持続可能なコーチング実践を形成することを支援することである。ペレはNCDA第3期修了生（2016-17年）であり、2017-18年にはシニア・コーチデベロッパーとしてNCDAのコーチデベロッパー発展プログラムに参加している。

クリス・ナンは、人々が自分の潜在能力を最大限に発揮することを自らのモチベーションとしている。アスリートとしては、コモン・ウェルスゲームズにオーストラリア代表として参加した経験を持つ。その後、自分自身の知識と意欲を活かして、世界有数のパラリンピックコーチの一人となった。2000年シドニーパラリンピックではオーストラリア陸上チームを世界トップクラスの成績へと導いた。障がいを持つ人々に対して多大なる貢献をしたことで、オーストラリア勲章（Order of Australia Medal）を叙勲している。現在は、オリンピック・パラリンピック委員会で国際コンサルタントとして活動しており、特にコーチ育成、リーダーシップ、メンタリングを専門とする。リーダーシップにおいては、他者を導こうとする前にまず自分自身を理解することが極めて重要であると考えている。さらに、人々の成長に投資する組織こそが、より高いレベルのパフォーマンスを達成できると考えている。そして、「よき人間性を育み、よりよい結果を得る」を自らの信念としている。